

(9) イチジク

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
疫病 (<i>Phytophthora</i>)	①葉、果実、枝の罹病組織は早期に除去して処分する。 ②密植を避け、通風を良くする。 ③土壌からの一次伝染を防ぐため樹冠下に敷きわらをする。 ④排水を良好にする。 【参考事項】 前年の病果、病葉などが土中に残り、厚膜胞子で越冬する。降雨が続くと多発しやすい。 6～7月頃から発生し、葉の発病が多いと果実に多発する。7月と9月に発生のピークがある。   発病果（白いかび） 発病果（軟化腐敗）
酵母腐敗病 (<i>Conidia</i> , <i>Pichia</i>)	①発病果は早期に除去して処分する。 ②収穫遅れをなくし、適期収穫を励行する。 【参考事項】 ショウジョウバエ類の媒介により伝染する。成熟した果実の小果や花托に発生し、発酵臭を伴い、腐敗を生じる。 露地栽培では、降雨後に被害が急増する。   発病果 発病果
黒かび病 (<i>Rhizopus</i>)	①発病果は早期に除去して処分する。 ②密植を避け、通風を良くする。 ③雨よけ栽培を導入する。 ④傘掛けをおこなう。 【参考事項】 病原菌は土壌中や空気中に存在し、風媒伝染するほか、ショウジョウバエなど昆虫が媒介する。果実の罹病性は果実の肥大に伴って高まり、熟期を迎えた果実に感染する。   発病果（ショウジョウバエ媒介） 発病果（黒いかび）
さび病 (<i>Phakopsora</i>)	①発病葉を集めて処分する。 ②密植を避け、通風を良くする。 【参考事項】 病原菌は落葉上で冬胞子の形で越冬する。発病適温は25～30℃付近で、5月から及び8月下旬からの年2回発病する。   発病葉 発病葉の葉裏

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
炭疽病 (<i>Glomerella</i>)	①発病果は早期に除去して適切に処分する。 【参考事項】 病原菌は菌糸及び分生子の形で被害果に付着して越冬する。8～9月の果実肥大後期に湿潤な天候が続くと発生が多い。
株枯病 (<i>Ceratocystis</i>)	①苗は無病地で育苗する。 ②さし穂は無病圃から採取する。 ③発病株は早期に処分する。 ④排水を良好にする。 ⑤定植時にアルカリ資材で株元の土壌 pH を 7.5～8 に矯正する。 【参考事項】 土壌及び苗木伝染する。ほ場内では病斑上に形成された分生子、子のう胞子、厚膜胞子が風雨などによって運ばれて伝染する。地温が 25～30℃で発病が多い。湿潤条件は発病を助長する。病原菌は pH 8 前後で発育が抑制される。   病斑上に形成された子のう殻 発病株
アザミウマ類	①園内及び周辺の雑草を除去する。 ②樹冠下に光反射シートを設置する。 できれば園外周部にも設置する。 ③幼果の果頂開口部をサージカルテープなどでふさぐ。 ④園外周部を 0.8mm 目合いの赤色ネットで囲む。 【参考事項】 主に成虫で越冬する。年 5～8 回発生する。果樹のほか果菜類、豆類、花き類、雑草など多くの植物に寄生し、花や幼果を加害する。一般的に梅雨期以降は発生及び被害果も減少するが、8 月以降もイチジク園内で多数捕殺され、中上段果実も加害されることがあるので注意が必要である。
カミキリムシ類	①成虫を捕殺する。 ②被害部を見つけ針金などで刺殺する。 ③白色反射マルチシートで主枝及び主幹部を覆う。 【参考事項】 幼虫で越冬（樹幹内）する。キボシカミキリは年 1 回（ときに 2 回）、5～10 月に発生する。クワカミキリは 2 年（まれに 3 年）に 1 回、7～9 月に発生する。
クワハムシ	①周辺の雑草を除去する。 【参考事項】 老熟幼虫で越冬（土中）する。成虫は年 1 回の 4～6 月に発生する。幼虫は根を加害する。
ハダニ類	①園内の雑草を除去する。 ②乾燥が続くと多発するので、土面に敷わらや灌水をして、過度の乾燥を防ぐ。 【参考事項】 成虫で越冬する。年 10～11 回発生する。薬剤抵抗性ハダニの発生を抑制するために、同一系統薬剤の連用は厳に慎む。
ネコブセンチュウ	①根の活力を高めるため、中耕を実施する。 【参考事項】 全てのステージで越冬する。年 4～5 回発生する。5～6 月、9～10 月の増殖が大きい。